

第2報告 近世日本のアジアへの発信—漢文学を通して

蔡毅

南山大学教授

(蔡毅氏の報告は録音ができなかったため、報告の内容を改めて文章にして書き起こしたものを掲載する。)

はじめに

日本漢文学の長い歴史を眺めてみると、中国文学が圧倒的な影響を及ぼしていたと言うまでもない。「先生」と「弟子」の関係という動かせぬ現象は、日本漢文学の宿命だと言ってもいいであろう。しかし、日中文化交流史において、通常は明治維新を境として相互の立場は逆転した、すなわち日本は中国より先に西洋文明を導入したことにより師弟関係が逆転したとされている。ところが、実はこの「脱亜入欧」の歴史観だけでは捉えられない事実がある。漢文学の視点からみれば、日中間の「逆転」の兆しはすでに江戸中期から現れていたのである。そのことは注目し値するだろう。というのは、日本が東アジア漢字文化圏の一員として、「先生」の中国に対して「弟子」でありながら逆に中国に対して自らの誇るべき漢文学の実績を示そうとする動きは、江戸中期以後さまざまな次元で見えるからである。小論は、この漢文学世界での「逆輸入」現象の中から長崎を舞台とする二つの実例をとりあげ、その経緯を解明していくとともに、その背景と日中文化交流史における意味を検討していく。

一、日本人の漢詩作品を中国へ

日本人が書いた漢詩は、本場の李白・杜甫をはじめとするすぐれた詩人たちのレベルには到底及ばないと考えられてきたことから、実は日本漢詩が中国に伝わっていたという事実は、長い間学界ではほとんど知られていなかった。ところが、筆者の近年の調査によれば、その事例は多くはないものの、唐から清末まで絶えることなく見られる。特に清末、すなわち明治維新後の日本は鎖国状態から脱却し、中国の文人と直接交流できるようになったため、中国の詩話類の著書に日本漢詩に関する記述が以前より著しく増えたのは明らかである(拙稿「葉燁『煮葉漫抄』と日本漢詩」、『詩話学』第8号、2008。「潘飛声『在山泉詩話』所収日本漢詩考」、『域外漢籍研究集刊』第5輯、2009。「李長榮『海東唱酬集』考」、『台湾古典文学研究集刊』第1号、2009。などを参照)。

ここでは、こうした明治日本の漢詩の中国への「逆輸入」に先立って、江戸後期の代表的な漢詩人頼山陽の漢詩集『日本楽府』がどのようなルートを経て中国に伝わっ

たのかに、注目してみたい。

江戸時代の日中文化交流は、主に長崎を窓口として、多くの清代の客商が中国の書籍などを将来することによって行われたのであり、それについては故大庭脩教授の一連の業績で詳しく解明されている。しかし、それらの清客たちはただ一方的に中国から書籍を運び込んだだけでなく、逆に江戸漢詩をはじめとする日本漢籍を中国へもたらしすことにも大きな役割を果たした。この側面は最近注目されるようになったのだが、まだそれほど明らかにはなっていない。例えば、十九世紀前半の長崎で活躍した清客の江芸閣・沈萍香らは金儲けばかりを考えていたわけではなく、すぐれた漢学素養を身につけた人物でもあったから、頼山陽をはじめとする江戸漢詩人たちと交遊し、『日本楽府』およびその他の江戸漢詩を中国へ紹介しようと試みていた。その際、日本人の詩作を添削・講評もしたので、中国人がいかにも日本漢詩を評価していたのかも、そこから窺うことができる。筆者は、長崎で発見された江芸閣・沈萍香の52通の書簡を判読し、彼らの努力によって日本漢詩が続々に中国に紹介されたか、とくに頼山陽の『日本楽府』がどのようなルートを通して中国に伝わり中国の文人たちに読まれていたかを究明した。具体的には拙稿「長崎清客と江戸漢詩——新発見の江芸閣・沈萍香書簡をめぐる」(『東方学』第108輯, 2004)を参照していただきたいが、ここではその過程のみを簡潔にまとめておく。

まずは新発見の書簡について。これらの書簡は、京都大学の松田清教授が1997年に長崎で資料調査を行った際に、長崎の古美術商川内利昭氏の所蔵文書の中から発見したものである。松田教授は後に川内氏から原本の複印を入手し、筆者にその考察を託された。本書簡は、同年、長崎県立美術博物館により書の作品として購入され、同館で所蔵されることとなった。筆者は長崎に赴き、松田教授の紹介を介して長崎県立図書館の本馬貞夫氏の協力を仰ぎ、書簡の原本を目にすることができた。書簡はすべて趣向を凝らして表装され、二冊にまとめられていた。一冊は、江芸閣が水野媚川に宛てた書信と自作詩文の手稿をおさめたもので、全部で三十二通あった。もう一冊は沈萍香が水野媚川に宛てた書信と自作詩文の手稿をおさめたもので、全部で二十通あった。合計すると五十二通ということになる。おそらく年代にもとづいて並べられているものと思われるが、書簡の多くは年代が記されていないため、その順序については疑いの余地がある。しかし、ここではひとまず現在の順序によって番号をつけ、第何号の書簡などと表示することとする。これらの書簡には一部破損や虫食い、欠落が見られるが、二百年近く前のごく普通の中国商人の書信原稿がかくも大事に保管されてきたことに、敬服の念を禁じ得ない。

十九世紀の初めに長崎に往來していた清客の中で、最も「文名」の高かったのは、おそらく江芸閣であろう。江芸閣、名は大楢、字は辛夷、號は芸閣、蘇州の人。彼は文化十一年(1814)にはすでに長崎に足跡を残している。後述するとおり、同年、市

河寛齋が長崎に遊んだ際、江芸閣は彼と頻繁に詩文のやりとりをし、それらをすべて寛齋の『瓊浦夢余録』に収めている。また、頼山陽が文政元年（1818）に長崎に遊んだ際にも、「余聞江名久矣」と述べていた。彼はほかにも多くの日本漢詩人と交遊し、おびただしい資料を残したので、重点的に考察するに値する人物である。

もう一人の重要な人物は沈萍香である。彼の知名度は江芸閣には遠く及ばないものの、第十号書簡で、自らを蘇州の人、名（字？）は鳳翔、号は萍香、と述べている。『割符留帳』には、彼が長崎に九度來航したことが記されている。

江芸閣と沈萍香が江戸漢詩人と交遊した際に、その重要な仲立ち人となったのが、二冊の書簡の受取人である水野媚川であった。水野媚川（？～1846）、名は勝太郎、字は鏡卿、号は媚川。清客の住まい「唐人屋敷」の管理を担当していた。

発見された江芸閣・沈萍香書簡の中で最も重要なのは、やはり彼らと頼山陽との交流の記録である。

文政元年（1818）五月、頼山陽はかねてから望んでいた長崎への旅に出かけた。彼が長崎を訪れた最大の目的は、当時すでにその名声が広まっていた江芸閣に会うことであった。残念ながら、江芸閣は台風のため予定通りには來航できなかったため、二人は会わなかったものの、これ以後時折書信をやりとりするようになり、頼山陽の詩集にも江芸閣との唱和の作が多く収録されている。彼と書面で交流のあった清人の中では、江芸閣が最も親しかったことは疑うべくもないが、実は頼山陽の江芸閣に対する内心の評価は別のところにあった、というべきである。

周知の如く、江戸後期の漢詩人の間にあって、頼山陽は最も「自国意識」の強い一人と言うべき存在であった。彼の政治思想や歴史認識についてはここでは評しないとしても、わずかに彼の文学主張をみるだけで、その清代の文人との平等な対話を求める心情がいかにか切実なものだったかが見てとれる。頼山陽はその著名な「夜読清詩人詩戲評」において、明末以降の十五名の詩人を一人ずつ評しているが、或いは褒め或いは貶め、みな彼の自立した価値観から導き出されており、先人の日本漢詩人が中国に対して抱いていた「謙遜」の感情は見られない。この詩の最後の四句から、頼山陽の江芸閣に対する表面上の尊重の裏に隠された本当の意味がどのようなものであったかが分かる。

吹燈覆帙為大笑，誰隔溟渤聽我評。安得対面細論質，東風吹髮騎海鯨。

海を隔てた清代の詩人に対し、彼は、日本側からいつも同調していくだけの関係にはもはや満足できなくなり、相手が自分の声にも耳を傾けてくれることを切望したのである。こうした欲求は頼山陽の個性がそうさせた一面もあるが、江戸中期以後日本の民族意識が高まったこととも密接に関わっている。後述するように、この時期にな

ると、中国で散逸した古籍のみならず、日本人の漢文著作も続々と大陸に流入し始めていた。新たに発見された江芸閣・沈萍香の書簡は、今まで知られることのなかった事実、つまり完全に日本人の手によるある著作が大陸に伝わっていく具体的な過程を、我々に教えてくれた。その著作とは、すなわち頼山陽の『日本楽府』である。

頼山陽は文政十一年（1828）末に、明代の李東陽の『擬古楽府』をまねて、日本の歴史を詠んだ『日本楽府』六十六首を一気呵成に仕上げた（そのうちの一部は過去の作品の改作である）。同書は文政十三年（1830）冬に刊行され、一年余り後に中国の文人から評価を得た。これは、日本の漢詩が大陸に伝わった中で最も速い例の一つといえるかもしれない。では、なぜこのように速やかに伝わったのであろうか。江・沈の書簡が、その秘密を解く手がかりとなる。

江芸閣が水野媚川にあてた第十三号書簡にはこうある。

今春所托評閱頼楽府，携婦即送晚香主人。奈伊即日起程往浙江兒子署中去矣，此書帶去未還，且待伊婦向索也。

「所托評閱」とあるので、水野媚川からの依頼であったことがわかる。「晚香主人」は顧鉄卿という中国の名士である。この書簡には年月日が記されていないが、天保三年（1832）の春だと考えられる。しかし、江芸閣が「晚香主人」に依頼した「評閱」については、その後何の消息もない。なぜなら、この頃頼山陽の訃報が伝わったからである。江芸閣が水野媚川に宛てた第十六号書簡には次のようにある。

驚聞山陽先生已歸道山，惜乎早却一二十年矣。然數之所定，人不可不守。且喜後起有人，懿范可繼，而蟬蛻之理，古今一轍，毋足望而長嘯也。……附上頼公手沢信皮一帋，以明我珍重故人之至意，久藏不敢失也。望附封前去，用誌真心交誼云。

この書簡の日付は「六月初三日」となっている。頼山陽が天保三年（1832）九月にこの世を去ったことから考えると、江芸閣のこの手紙は翌年に書かれたものである。この手紙を出してまもなく江芸閣は再び水野からの書信を受け取り、そこでまたすぐ「六月初十日」の日付を入れた第十九号書簡において次のように書いた。

六月七日奉到尊札，……同時又接手書，切云頼公樂府之需。斯時難以托寄，使草率而致誤，為之奈何。故非敢緩也，差有待也，終不誤閣下徐君墓劍之義可了。

「斯時」以降の一段にはどうやら口にしがたい苦衷があるようで、具体的な状況は

今となつては知る由もない。ただ「徐君墓劍」の一語が、春秋時代に延陵の季子が徐君の義に感じて佩劍をその墓に掛けた典故に基づいていることから、この書簡が頼山陽の死後に書かれたものであることがわかると同時に、亡友に対する水野媚川の厚い情も感じられる。

残念なことに、中国の文人に依頼して『日本楽府』に「評閲」を加えてもらうという使命を、江芸閣は結局果たすことができなかった。幸い、水野は江芸閣にそれを託すのみならず、他にも手助けしてくれそうな人物をこっそりと捜しており、この人物は果たせるかな彼の期待に背かなかった。それが沈萍香であった。

沈萍香の江戸文壇における名声は、前にも述べたとおり江芸閣の足もとにも遠く及ばないが、数多くいる清客のうちでは、やはり文人墨客の部類に入る。このため水野媚川との間にもある特別な縁があった。

沈萍香の第十六号書簡は、実は書簡ではなく沈と水野との筆談の記録で、時期が記されていないが、天保三年（1832）前半のものと考えられる。発見された江・沈書簡の中で、この筆談はおそらく最も史料的価値を有するものである。よって以下にそれについてやや詳しく考察を加えることとする。

水野媚川が最初に頼んだ「翁先生」は、すなわち翁廣平、字は海琛、号は海村、江蘇呉江の人である。彼の『吾妻鏡補』は中國で最初の日本研究の集大成であり、近年広く注目を集めている。同書が引用する日本の資料は四十一種にも達し、当時の条件から考えれば堂々たる充実度である。ただ、翁廣平は科挙にも及第せず、仕官もかなわず、一生故郷の平望に蟄居したままほとんど外に出ることはなかったのに、その資料はどこから手に入れたのだろうか。その秘密は、当時日中貿易の主要な港であった浙江の乍浦にある。乍浦は翁廣平の故郷から近く、また彼は長崎に往來していた呉の地の清客たちともつきあいがあったから、日本を研究する上で他の人が到底及ばないほどの便利な条件を有していたわけである。沈萍香が『吾妻鏡補』の執筆について了解していたかどうか、また『日本楽府』を同書におさめようという企図があったかどうかについては、現在考証できない。しかし同郷人として、彼は翁廣平が当地の「日本通」であることは知っており、だからこそ彼が水野媚川に紹介したと考えてまず間違いないだろう。

実は沈萍香が見据えていた目標は更に高く大きかったようで、それは筆談の中に見える「翁海村、知不足」の六字から見てとれる。鮑廷博の『知不足齋叢書』は、太宰純校の『古文孝經孔氏伝』などの書籍を収めていることで当時の日本で名が知れわたっており、翁廣平は鮑廷博との交遊深く、『知不足齋叢書』は三十集ですでに一応完結したかたちだったとはいえ、沈萍香が詳しい事情を知っているとは限らない。翁廣平を通して『日本楽府』をこの叢書に収めてもらうということこそ、沈萍香が水野に約束した壮大な目的ではなかったろうか。

『日本楽府』は翁廣平の方には確かに送り届けただけでなく、翁はわざわざそのために長文の序を一篇書いてくれた。その序の中では、もう一人の中国人文人が登場する。錢泳（1759～1844）、字は立群、號は臺仙或いは梅溪、江蘇金匱の人。翁方綱らと交遊があり、詩画に巧みで、日本の文学や歴史にも興味があった。彼は今の無錫のあたりに家を構えていたため、翁廣平と同様清客たちを通して日本の典籍を見ることができ、頼山陽の『日本楽府』もそのようにして目にしたのであった。『頼山陽全伝』天保三年（1832）十月廿四日の条には次のようにある。

（清・道光十二年）この日、清国・錢梅溪は、沈萍香が長崎来舶中に求めし『日本楽府』を贈られ、やがて五律二首を作り、追慕の余、小屏風に添へて、京都・頼家へ送り来り（三年後に到着）。中川漁村は、それを梨影から示された。支峰は、又、その詩を『楽府』に冠して、自から跋を添へ、『増補』本（明治十一年二月）を刊行してゐる。

沈君萍香、嘗遊長崎島、於市中得『日本楽府』一冊、持以示余、為題其後二首。

文教敷東国、洋洋播大風。伝來新楽府、実比李尤工。（自注、謂李賓之、尤西堂也）稽古聯珠璧、斟今考異同。天朝未曾有、還擬質群公。

詩才真幼婦、史筆表吾妻。日月無私照、風雲漸向西。雄文標玉管、彩筆敵金閨。聞説扶桑近、高攀未可躋。

道光十二年十月廿四日、句吳・錢泳題。

この錢泳の題詠は、おそらく中国の文人が『日本楽府』に対して与えた最初の評価である。その貴重さゆえ、明治十一年（1878）に『日本楽府』の改版増補を行った際、山陽の子頼復（支峰）がそれを特に巻末に補った。錢泳が詩を作ったのは「道光十二年十月廿四日」であり、頼山陽がこの世を去ってちょうどひと月目にあたる。山陽もこの異国の知音を得て、あの世で感慨にふけったであろうか。注意を引くのは、翁廣平は「此冊沈萍香先生得於長崎島市中」とし、また錢泳も「沈君萍香、嘗遊長崎島、於市中得『日本楽府』一冊、持以示余」と述べ、どちらも日本人水野媚川が特に依頼したものであることには触れず、また沈萍香が偶然それを得たのか、それとも意識的に持ち帰ったのかをも明らかにしていないことである。偶然得たのか、それとも意識的に持ち帰り広めたのか、この二つはその文化交流史上の意義において天と地ほどの開きがある。すなわち前者がただ珍しいものを探すことに目的があるのに対し、後者は自主的な推薦だからである。新たに発見された沈萍香の書簡が事の顛末を仔細に語ってくれることの貴重さが、ここからもより明確になると言える。

二、日本に佚存する中国の漢詩作品を中国へ

江戸中期、すなわち十八世紀半ば頃から、日中文化交流において一つの新しい動向が現れた。それは、中国ではすでに散逸したが、日本になお現存する漢籍を中国へ還流させようという営みである。林衡（述齋）が編集した『佚存叢書』（全六十巻）がその代表で、前述のように、太宰純校の『古文孝經孔氏傳』などを収めている鮑廷博の『知不足齋叢書』もしばしば資料のよりどころとなっていたため、中国では大きな反響を呼んだ。ここでは『佚存叢書』には入っていないが、同じく中国でも名高い『全唐詩逸』を取上げて、この新しい気運の一端を見てみたい。

清代康熙年間になった『全唐詩』は、詩人 2200 余人、詩作 4 万 8900 首を収める、詩歌全盛の時代唐の詩総集である。しかし、「全」と言っても漏れがないとは言い切れず、20 世紀になって中国では初めて補遺について論じられるようになった。数十年に渡って学者たちが努力した成果の集大成が陳尚君氏の『全唐詩補編』三冊（中華書局、1992 年）である。本書は 4300 余首・句 1100 余を補い、中国の既存・新出の資料のみならず日本など海外伝存の資料にも及ぶ文献博搜と緻密な考証が生んだ労作と絶賛されている。しかし、もっとも早くこの補遺の必要に気付き、その作業に先鞭をつけたのは、中国よりも日本の学者、江戸時代の漢詩人市河寛齋が編集した『全唐詩逸』である。これは『全唐詩』が世に問うたあと最初の補遺として、また外国人の手になるものとして、つねに重視されてはいるが、この本がどんなルートを通して中国に持って行かれたかについては一向に詳しく知られていなかった。筆者の調査によって、『全唐詩逸』の編纂・流布の過程には、日中間の文化交流史上において興味深い逸話が隠されていることが分かった（拙稿「市河寛齋と『全唐詩逸』」、『人文中国学報』第八期、香港浸会大学、2001）を参照されたい。

市河寛齋（1749～1820）は名を世寧、字を子静、号を寛齋と称する江戸の人である。頼山陽が江芸閣の名を知ったのは市河寛齋の紹介によるが、彼は詩に長じ、「江湖詩社」の盟主となって天明から文政に及ぶ漢詩壇に重きをなしたが、また好古の癖を有して考証に秀でた。彼が特に着目したのは、中国ではすでに失われて日本にのみ存するいわゆる逸書であった。『全唐詩逸』が依拠した典籍は十一種で、その中では『遊仙窟』と『李嶠雜詠詩』が逸書である。『文鏡秘府論』は空海の編纂に成る書ではあるが、そこに抄録される中国詩人の作品の多くは、現存する典籍には見えない。寛齋が主に依拠したのはこの三書および『千載佳句』等の秀句集であった。『全唐詩逸』は、日本伝存の文献から『全唐詩』未収録の詩 72 首を補う以外に、残句 279 を収める。所収作者は 128 人を数え、うち 82 人は『全唐詩』に見えない。

長年の心血を注いだものとして、市河寛齋はこれが清国に伝えられることを切に望んだ。しかし、『全唐詩逸』の稿本はすでに天明七年（1787）までに成っていたのだ

が、経費や版元の理由で刊行に至るまでに様々な紆余曲折を経ることになった。万策を尽きた寛齋だったが、享和三年（1803）、長崎へ行って『全唐詩逸』を直接清人に託してはどうかという、長男三亥（のちに号を米庵、「幕末三筆」とも呼ばれる著名な書道家になる）からの申し出を受けた。若くてかつ病弱な三亥が一人長旅をすることを心配し、寛齋は同意しなかったが、三亥の方はひそかに自ら写本一部を作成したうえ、京都へ行くことでまず寛齋の許可を取り付けた。そして三亥は江戸を出発し、冬に京都に入り、当時関西に寄寓していた寛齋の弟子菊池五山の援助を得て、文化元年（1804）、『全唐詩逸』は京都においてようやく刊行されたのである。三亥はこの刊本を携えて更に西に向かった。この時すでに寛齋は事の真相を知っていたが、止めるすべがないというよりは、内心期待を持って見守っていたようである。五月、三亥は長崎に至り、唐通事の颯川仁十郎を介して清商張秋琴に『全唐詩逸』を手渡しした。張は帰国後、呉江の文人翁広平に託す。翁は当時、『吾妻鏡補』という中国最初の日本研究集大成的著作を撰述していた。彼はこの著作中に『全唐詩逸』を多数引用し、さらに跋文を書いた上でこれを鮑廷博に託し、『知不足齋叢書』に加えるよう勧めたのである。しかしながら『全唐詩逸』の中国での刊行は、その後はほぼ二〇年にわたって実現しなかった。その原因は今日では知りようもないが、寛齋父子は待ち焦がれること頻りにであったろう。かくして三亥の長崎行きの十年後、文化十年（1813）に、寛齋自身も久しく心にあったその地を訪ねることになる。およそ一年の長崎滞在期間中、寛齋はかつて『全唐詩逸』を寄託した颯川仁十郎と張秋琴にも会っているが、その後いかなる着落を見たのかは聞けなかった。前述の江芸閣に対しては、やはり『全唐詩逸』一部を贈っているが、これも江に力を借りて清国に伝える宿願を果たそうとしたものようである。

結局寛齋は文政三年（1820）に世を去るまで、『全唐詩逸』の清国での刊行をみとどけることができなかった。しかし、その三年後の清・道光三年（1823）に、『全唐詩逸』はついに『知不足齋叢書』第三〇集の一種として刊行された。このとき鮑廷博はすでに亡くなっており、二八集以降の編集は子の鮑志祖の手に移っていた。文政十一年（1828）、『知不足齋叢書』の刊本が舶載され、寛齋の友人で、かつて『全唐詩逸』に関心を持っていた林述齋が先ずこれを眼にし、ただちに三亥を招いて丁重に手渡したのだった。三亥は亡父の霊前にその経緯を報告できる嬉しさを菊池五山に伝えている。同年、三亥はこの『知不足齋叢書』の刊本を底本として再度『全唐詩逸』を刊行した。菊池五山の跋文には、『全唐詩逸』の編纂から刊行に至るまでの、そして中国に伝えられてから日本に帰るまでのおよそ四十数年にわたる数奇な物語が詳しく示されている。唐詩の遺篇を伝える貴重な資料が日本に残存することを中国の学者に知らしめ、学术交流に大きく寄与したのみならず、寛齋父子が次々と身を挺して進み、はるかに離れている長崎まで足を運び、ただ一冊の本を中国で流布させようとし

た熱意には、われわれは敬服を禁じえない。これはまことに江戸時代における日中文化交流の佳話というにふさわしい。

おわりに

頼山陽の『日本楽府』と市河寛斎の『全唐詩逸』の中国への「逆輸出」を合わせて考慮すれば、次のような指摘ができると思われる。江戸後期において、日本漢学界はすでに中国に追随することに満足せず、独自色を出そうとしていた、と。そして同時に、その成果を積極的に文化の宗主国たる中国に伝えようとしていた、と。こうした日本から中国へのフィードバック現象は、数量からすれば取るに足りないかもしれないが、こうしたことがあってこそ、日中間の文化交流は真に互いに往還することができたのである。もしこの「逆輸出」の経路を全て究明できれば、日中文化交流史において従来顧みられることのなかった新たな一ページを切り開くことができ、東アジア漢字文化圏全体に対する新たな視座を獲得することができるだろうと筆者は考える。漢詩という純粋な中国文学のジャンルにおいてでさえ相互交流の事実があったということは、日本文化が世界に対して持続的に発信していたという新たな歴史を浮かび上がらせることになるだろう。他方、中国文学からすれば、これまで閉鎖的で自足的なものとして考えられてきたが、実は開放性と包容性を含んでいたという事実が明らかになり、さらに広い視野から再検討できる可能性が示唆されている。なお、幕末明初という激動の時代を斟酌すれば、日本では東アジア漢字文化圏に対して自らの存在感をアピールしたいという文化的自覚が芽生えつつあり、そうした中で明治維新を迎えたとも言えよう。近代日本の変革を考える際に、漢文学はつねに時代遅れなものとしてマイナスにみられがちだが、実際はこの古そうな伝統文化の母体の中にも新しい胎動があったことをわれわれは看過してはならないだろう。畏友斎藤希史氏の『漢文脈の近代—清末・明治の文化圏—』（名古屋大学出版会、2005）は明治期における漢文学の役割を鋭く分析しているので、この時代については彼に譲ることにしておこう。小論はただその前の時代の若干の歴史事実を補足し、その中国への発信の意義を指摘するだけにとどめておく。